



岐阜市曹洞宗林陽寺  
岩水龍峰住職の寺おとし

# ワンコイン修行と銘 打ち地域の絆を深 める住職の道心

檀家百軒もない農村寺院が輝いて見える。住職家族一丸となり門戸を開放。様々な催しに地域の人が集まるのだ。岐阜市の曹洞宗林陽寺、岩水龍峰住職（六十六歳）。その布教を名付けて「ワンコイン修行」という。

自分を深く反省しましょう。自分をよく見つけてみましょう」

日曜日の朝八時、静謐な本堂でそう十人ほどの坐禅会の参加者に語りかけるのは、岐阜市岩田西に建つ曹洞宗林陽寺の岩水龍峰住職（六十六歳）である。

同寺の行う坐禅会、写経会、ヨガ教室には市内のみならず、隣の一宮市や各務

は自分で、もう一人も自分。

ヶ原市、本巣市からも老若男女が集まる。予約を募ればすぐに満席。地元の新聞やタウン誌にも取り上げられ、評判を呼んでいるのだ。こう書けば、檀信徒の多い都会の大利を想像されよう。が、林陽寺は檀家百軒を切る小さなお寺なのだ。しかも、JR岐阜駅から車で約三分の農村地帯にある。とても条件がよいとはいえない林陽寺になぜ、人が集まるのか。

## カルチャーセンターで坐禅会

林陽寺は県道から田んぼに挟まれた農道に入り、標高百六十五メートルの清水山を背にして建つ。近くには長良川も流れる。手すりを備えた階段を上り山門を



林陽寺の岩水龍峰住職

くぐると、樹齢約百五十年のしだれ桜が迎える。樹高約十六メートルのこの桜は枝振りがよく、毎年、開花の時期にはライトアップをして、コンサートも行っている。その雰囲気よさから演者からも出演依頼が殺到。演者は三年先まで決まっているというから驚く。

境内正面には七間半四面の木造本堂が建つ。大正十三年の建立だ。それまでの本堂は、明治二十四年に岐阜県一帯を襲ったマグニチュード8の直下型、死者七千人以上を数えた濃尾地震により倒壊した。村民の懇志により、三十数年後に再建されたのだ。右手には平成三年造の庫裡が、左手には境内墓地が広がる。

林陽寺は平安時代初頭の延暦十五（七九六）年、弘法大師が全国行脚の途中、数年間当地にとどまり開いたと伝わる古刹だ。本尊は薬師如来である。無住の時期が続いたが、寛文五（一六六五）年、曹洞宗寺院として再興された。

年中行事は活発だ。新年一月の折禱会、

大般若会、高祖（道元禪師）降誕会。四月は花まつり。八月は施食会、九万九千日、盂蘭盆会、地藏盆。十月は開山忌、達磨忌。十一月は太祖（瑩山禪師）降誕会、布袋尊大祭。十二月は成道会。もちろん春秋の彼岸会などもある。

岩水住職が坐禅会等の取り組みを始めたのは四年前のこと。それまで岩水住職は岐阜女子大学の教務部の職員をしていた。が、六十三歳で大学を定年退職したのを機に、お寺での活動を模索した。

「何かやらねばと思って、市内の歓楽街にある中日文化センターで坐禅会をはじめたんです。ちょうど、映画『おくりびと』がヒットして、人々のなかに宗教的な目覚めが生まれつつあったためか、すぐに定員十人が埋まったんです」

坐禅会というと、どうしても堂宇や道場で行うものと思いがちだが、岩水住職は、町に出てカルチャーセンターで参加者を募ったのである。同センターでは四月から九月、十月から三月の半期ごとに、

上の写真／林陽寺で坐禅する老若